HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2017年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書
Author(s)	加藤, 博文; 平澤, 悠
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88800
Type	report
File Information	2017Hamanaka.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Preliminary Archaeological Field Report at Hamanaka 2 Site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

2017年度
北海道礼文町 浜中2遺跡
発掘概要報告書



Designed by YUKI koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

Center for Ainu and Indigenous Studies,
Hokkaido University

例　　言

1．本概報は、2017 年 8 月 1 日から 8 月 25 日にかけて日本学術振興会　研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「北方圏における人類生態史総合研究拠点」の一環、および北海道大学 Summer Institute として行った北海道礼文郡礼文町の浜中 2 遺跡における考古学発掘調査の概要報告である。

2．本発掘調査は、北海道大学が組織主体となり、以下の体制で実施した。調査組織は以下のとおりである。

発掘主体者　常本照樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・センター長）
発掘担当者　加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授）
調査員　　平澤　悠（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・博士研究員）
調査員　　岡田真弓（北海道大学創成研究機構・特任助教）
調査員　　久保大輔（北海道大学大学院 医学研究院・准教授）
調査員　　佐藤丈寛（金沢大学医薬保健研究域医学系・助教）
調査員　　近藤祉秋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・助教）
調査補助員　蔦谷　匠（京都大学大学院理学研究科 日本学術振興会特別研究員 (PD)）
調査補助員　女部田かなみ（慶應義塾大学文学研究科 修士課程）

遺　跡　名　　浜中 2 遺跡（北海道教育委員会登載番号：H-08-019）
所　在　地　　北海道礼文郡礼文町大字船泊村字ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発掘面積　　32 ㎡

3．2017 年度の調査実施にあたっては、科学研究費補助金基盤研究 A「境界域での民族集団の形成 ：考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」（研究代表者 ： 加藤博文、2016-2019 年度）、および日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「北方圏における人類生態史総合研究拠点」（プロジェクトコーディネータ：加藤博文、2013-2017 年度）の助成を利用した。

4．本概報は、本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。 出土遺物のうち、土器片の拓本・断面実測およびトレースは、佐藤理恵、霜出美由紀（北海道大学アイヌ・先住民研究センター事務補助員）が実施した。石器、骨角器類の実測およびトレースは加藤・平澤が実施した。
本概報の執筆は、以下のように分担している。
例　言、第 1 章、第 2 章、第 5 章第 4 節、第 6 章　加藤博文
第 3 章、第 4 章、第 5 章第 1 節・第 3 節　平澤悠
第 4 章（3）　久保大輔
第 5 章第 2 節　坂口隆

なお本年度の出土遺物のうち、動物遺存体は慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室において佐藤孝雄教授を中心に整理作業をおこなっている。また出土動物遺存体のうちカラフトブタとイヌについては、北海道大学大学院理学研究院多様性生物学分野の増田隆一教授を中心に DNA 分析を進めている。さらに年代測定および 2011 年度・2013 年度の調査で出土した人骨の安定同位体分析については、東京大学総合研究博物館の米田穣教授を中心に分析作業をおこなっている。

5. 2017 年度の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。

6. 調査に際しては、北海道アイヌ協会事務局より多大なご助力をたまわった。また調査地点地主である中谷榮氏には、調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、岩城修教育長、藤澤隆史社会教育主事をはじめ礼文町および礼文町教育委員会の支援と協力を得た。調査メンバーを代表して感謝の意を表する次第である。



目　　次

第１章　調査の目的と実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１節　調査の目的

第２節　礼文島における調査と研究拠点形成事業との関連

第２章　浜中２遺跡の調査と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第１節　調査にいたる経緯

第２節　礼文島の環境

第３節　遺跡の立地

第４節　調査への参加者

第３章　調査区について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第１節　調査区の設定

第２節　調査区の層序

第４章　検出された遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第１節　アイヌ文化期・オホーツク文化期の遺構

第２節　続縄文文化期の遺構

第５章　主な出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第１節　出土遺物の構成

第２節　土器

第３節　石器

第４節　骨角器

第６章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

第１章　　調査の目的と実施体制

第１節　調査の目的

浜中 2 遺跡での考古学調査は、2011 年から BHAP(Baikal-Hokkaido Archaeology Project) の一環として、アルバータ大学 (カナダ) と北海道大学が実施してきた。アルバータ大学との共同調査は、2016 年度をもってカナダ側の研究助成期間が終了したため、2017 年度の調査は、北海道大学の国際フィールドスクールとして、日本学術振興会の科学研究費補助金と研究拠点形成事業の支援を受けて実施した。

本遺跡は、これまで継続されてきた調査によって縄文文化期後半から 18 世紀のアイヌ文化に至る生活痕跡が 4m 以上に累積した多層遺跡であることが明らかになっている。2017 年度の調査は、2016 年度に調査区の南西端において、I 層中で確認されたアイヌ文化期のアワビ貝の集積遺構と、IX 層において確認された縄文文化期後期から晩期にかけての土器・石器・動物骨が集積する文化層の面的広がりを確認することを主たる目的として計画された。

第２節　礼文島における調査と研究拠点形成事業との関連

礼文島は、先史時代の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動の復元にとって最良のデータが得られるフィールドである。本プロジェクトでは、礼文島北部の遺跡の立地環境に注目し、船泊湾域の遺跡群において、1) 居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2) 砂丘形成過程と生業活動面の形成過程の相関関係の解明、3) 古人骨資料からの集団系統や古食性データに関するサ ンプルの収集、4) 遺跡周辺における古気候環境データの集成を目指している。

2012 年度からは、科学研究費補助金基盤研究 A「アイヌ民族文化の形成過程の解明に向けた総合的研究」(研究代表者 : 加藤博文、2012-2015 年度) の、2013 年度からは日本学術振興会研究拠点形成事業 (先端拠点形成型)「北方圏における人類生態史総合研究拠点」の研究助成を受けている。また 2016 年度からは科学研究費補助金基盤研究 A「境界域での民族集団 の形成 : 考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」(研究代表者 : 加藤博文、2016-2019 年度) に採択され、引き続き助成を受けている。

第２章　　浜中２遺跡の調査と概要

第 1 節 調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中 2 遺跡における国際共同調査は、2011 年度から開始された。調査にいたる経緯は、これまでの概要報告において提示した通りである（加藤・岩波・平澤・鈴木 2012)。 2012 年度の調査は、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態を確認する調査を実施した。2013 年度の調査は、7 月 23 日から 8 月 20 日までの期間で発掘調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2014)。 2014 年度の調査は、8 月 1 日から 8 月 31 日までの期間で実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2015)。 2015 年度の調査では、それまでのオホーツク文化期と続縄文文化期に加えて、下層にさらに連続することが確認された縄文文化期の遺物包含層の調査を目的として、8 月 1 日から 8 月 31 日までの期間で調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2016)。2016 年度の調査は、調査区の南側においてオホーツク文化期の包含層の調査を、調査区の北側では続縄文文化期および縄文文化期の遺物包含層の調査を主たる目的に 8 月 1 日から 8 月 21 日までの期間で調査を実施した。

2017 年度の調査は、引き続き最下層の文化層の確認と、調査区南側での上層の文化層の広がりを確認することを目的として計画された。またこれまでの調査内容については、幾度か口頭による報告も行なっている（岩波・長沼 2015、加藤 2015、岩波ほか 2016 など）。

第 2 節 礼文島の環境

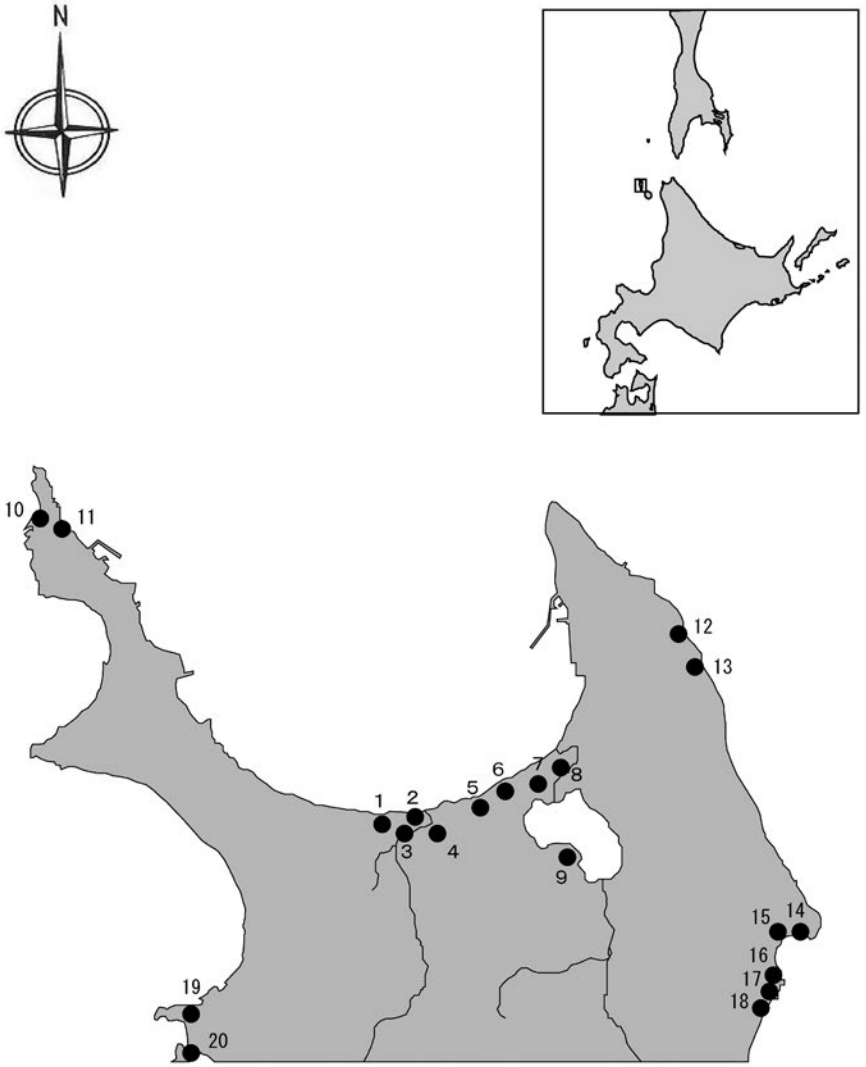
礼文島は、北海道島の北西約 60km に位置する離島である。島は南北に約 25.8km、東西に 7.9km と南北に細長く延びる。 島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入り江状の地形を作り出している。島の北部は、一転して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船泊湾は、遠浅の大きな内湾地形を作り出しており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘状地形が広がっている。

島の最高地点は、礼文岳で 490m であり、低標高の緩やかな起伏をもった島である。 島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。 植生としては、針葉樹 としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマザサが主体をなす。島の北端に広がる船泊湾は、海岸沿いに広がる砂丘列と東部に位置する久種湖で構成される。湾の東部に位置する久種湖は、周囲 6km ほどの淡水湖

である。 湖の前面には、船泊砂丘が東西ほぼ 1km にわたり続いている。 一方、船泊湾中央部には、島中央部より島最大の河川である大沢川が南から北へ向かい注いでいる。この大沢川の河口から湾の西側スコトン岬方向に向かい形成されているのが浜中砂丘である。これら二つの砂丘である船泊砂丘と浜中砂丘は、異なる時期に形成された複数の砂列帯によって構成されている。

第 3 節 遺跡の立地

船泊湾沿いに広がる砂丘からは、古くから石器や土器、そして人骨が出土することが知られてきた。これまでの調査でもこの一帯に縄文文化期からアイヌ文化期にわたる複数の遺物包含層が



1：浜中２遺跡、　2：浜中１遺跡、　3：神崎遺跡、　4：浜中５遺跡、
5：重兵衛沢１遺跡、　6：重兵衛沢２遺跡、　7：船泊遺跡、　8：オションナイ遺跡、
9：沼の沢チャシ、　10：スコトン遺跡、　11：水難諸霊の塔遺跡、　12：幌泊第１遺跡、
13：幌泊第２遺跡、　14：上泊２遺跡　15：上泊１遺跡、　16：上泊４遺跡、
17：上泊３遺跡、　18：東上泊遺跡、　19：鉄府イナウ遺跡、　20：西上泊遺跡

第 1 図　礼文島の位置と島北部の遺跡

存在することが知られてきた。船泊湾の東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化期後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期からアイヌ文化期にわたる遺物包含層が確認されている（第 1 図）。この船泊砂丘の西端には、重兵衛沢川が船泊湾に注いでいるが、砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層をもつ重兵衛沢遺跡、重兵衛沢 2 遺跡が知られている。船泊湾の中央部には大沢川の河口が位置する。 河口の西側の浜中砂丘には、浜中 1 遺跡と浜中 2 遺跡が位置する。浜中 1 遺跡は北海道道 507 号線の北側に位置し、海側に貝層や墓が集中することが知られ、また数多くの人骨資料が長年にわたり収集されてきた。遺跡の時期はオホーツク文化期から近世アイヌ文化期と推定されている。一方、浜中砂丘の南、後背丘陵の裾野には、神崎ウエンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドや旧教員宿舎周辺から、続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している。

浜中 2 遺跡の範囲は、現在の浜中集落にほぼ重なる。 現在、道道がこの浜中砂丘を東西に貫いて走っており、集落中央の最も高い地点は標高約 10 m を測る。砂丘の東西端は緩やかな傾斜を示し、砂丘自体の比高差は 5 m 程度を測る。この浜中 2 遺跡は、いくつもの文化層が累積する多層遺跡である。1990 年の浜中集落の排水管の付替え工事に際して実施された事前調査では、続縄文文化期からアイヌ文化期にかけての多層遺跡であることが明らかとなった。1990 年代には、筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が実施され、厚い貝層や住居、墓など長年にわたる複合的な生活痕跡が累積することが明らかにされた。また 2011~2015 年度には千葉大学文学部考古学研究室が、浜中砂丘の最高地点周囲において（旧中島商店敷地等）で学術調査を実施している。

第 4 節 調査への参加者

2017 年度の調査には、プロジエクトメンバーとして以下の研究者と学生が参加している。
木村亮介（琉球大学大学院医学研究科・准教授）、佐藤孝雄（慶應義塾大学文学部・教授）、坪田芳典（北海道大学非常勤講師）、高橋鵬成（東京都埋蔵文化財センター調査員）が参加した。 国際フィールドスクールへの参加学生と院生は以下の構成である。連合王国（オックスフォード大学、ロンドン大学、アバディーン大学、エクセター大学、グラスゴー大学、カーディフ大学）7 名、アメリカ（ハーバード大学、ワシントン大学、ポモナカレッジ、ウィリアムアンドメアリーカレッジ、ウェスタンミシガン大学、セントメリーズカレッジ、インディアナ大学）7 名、ロシア（イルクーツク国立大学、極東連邦大学）5 名、オランダ（フローニンゲン大学）2 名、デンマーク（コペンハーゲン大学）1 名、フィンランド（ヘルシンキ大学）1 名、台湾（台湾大学）2 名、日本（北海道大学、東京大学、慶應義塾大学、東海大学）31 名の 11 カ国から計 67 名。

また東京大学からは、理学部生物学科 A コース実習の授業の一環として近藤修（東京大学大学院理学系研究科・准教授）に引率された学生 7 名が参加している。また考古学とアートプロジェクとして沢則行（チェコ人形アカデミー・人形劇師）が参加した。

第 3 章 調査区について

第 1 節 調査区の設定

調査区の設定は 2016 年度までの調査を踏襲し、中谷榮氏の所有地南西隅の基準杭から設定した 4m 四方の グリッド配置に基づいている。グリッド番号は南北方向をアラビア数字、東西方向はアルファベットで表記し、これ らの北西交差点をもって呼称している（第 2 図参照）。 本年度の調査は大グリッド A01、A02、A03、B01、B02、B03、Z02、Z03 を対象に実施し、最終的な面積は計 32 m^2 となった。2016 年度に行った VIII 層以下の発掘作業では、作業用動線や足場を確保する必要上、1m 四方の小グリッドを市松状に掘削した。2017 年度は、IX 層を完掘すべく一部昨年度と重複する範囲を掘削した（A03-a1 ～ a4、A03-b3 ～ b4、A03-c1 ～ c2、B03-a3、B03-b3、B03-c1、B03-d1）。南側の 4 箇所（A03-c2、A03-c4、A03-d2、A03-d3）は、2016 年度からの継続で VIII 層から掘り下げを開始し、IX 層の途中に達した。

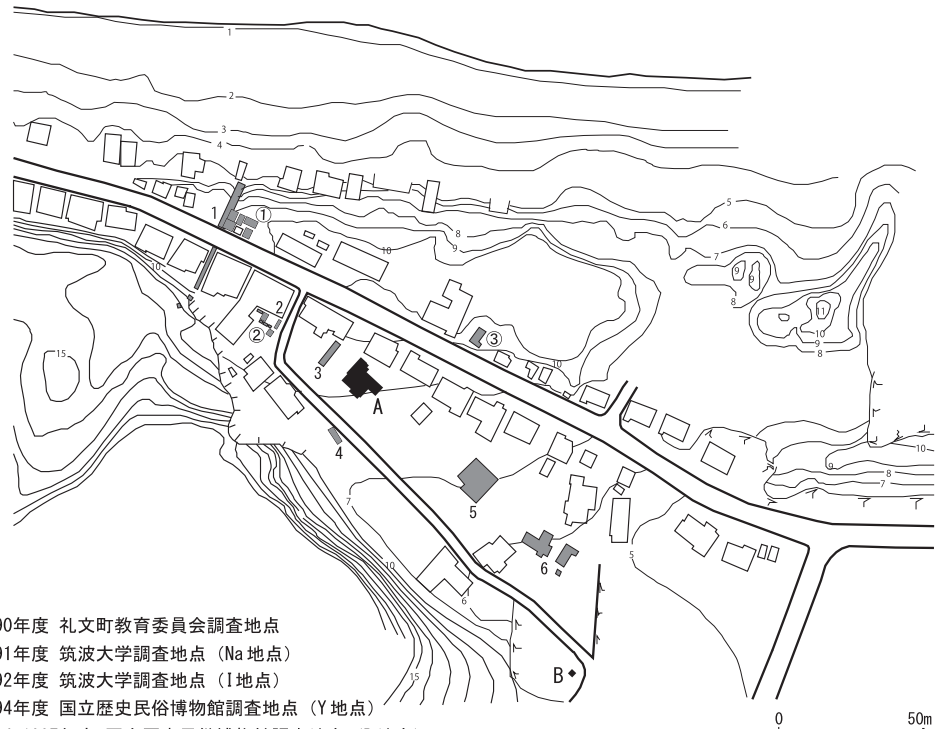
A02 調査区は、A03 調査区と隣接する北半分の 3 箇所の小グリッド（A02-a2、A02-b1、A02-b2）で、同様に 2016 年度からの継続で VIII 層から掘り下げを開始し、IX 層の途中に達した。

A01・B01 調査区の北側 では、2016 年度までにアワビ貝集積を確認した B01-a1、B01-a2、B01-b1 と B01-b から南側にあたる A01-b3 および B01-a4 を地表面から掘削した。2016 年度に確認された貝集積よりも上位において新規の集積が確認されたことにより、その遺構の上面で掘削を停止した。B02 調査区は 2016 年度に到達していた IV 層から掘り下げを開始し、全体をほぼ VI 層の上部にそろえて停止した。

第 2 節 調査区の層序

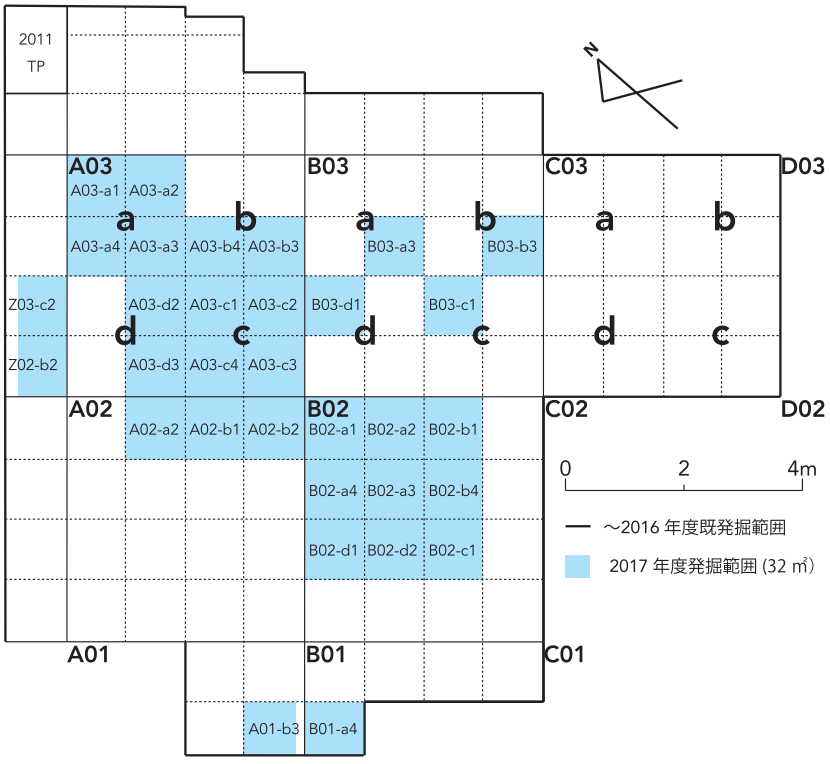
本遺跡の堆積層は、自然砂層と人為的な魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。 これらは互層となり全体で 厚い文化層を形成する。ラミナ状に堆積する魚骨層は発掘範囲の全域に連続して均一に広がるものではなく、部分的に重なりながらも、局所的な広がりを見せて堆積している。調査区全体の基本土層は、上層から

Ⅰ層：表土層および撹乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む
Ⅱ層：砂層。 近世アイヌ文化期の局所的なアワビ貝層、擦文文化期、元地式段階の遺物を含む
Ⅲ層：魚骨層および貝層。 オホーツク文化期（元地式、沈線文式、刻文式段階）の遺物を含む
Ⅳ層：砂層。 オホーツク文化期（十和田式段階）の包含層
Ⅴ層：砂層。 オホーツク文化期（十和田式段階）～続縄文文化期の文化層

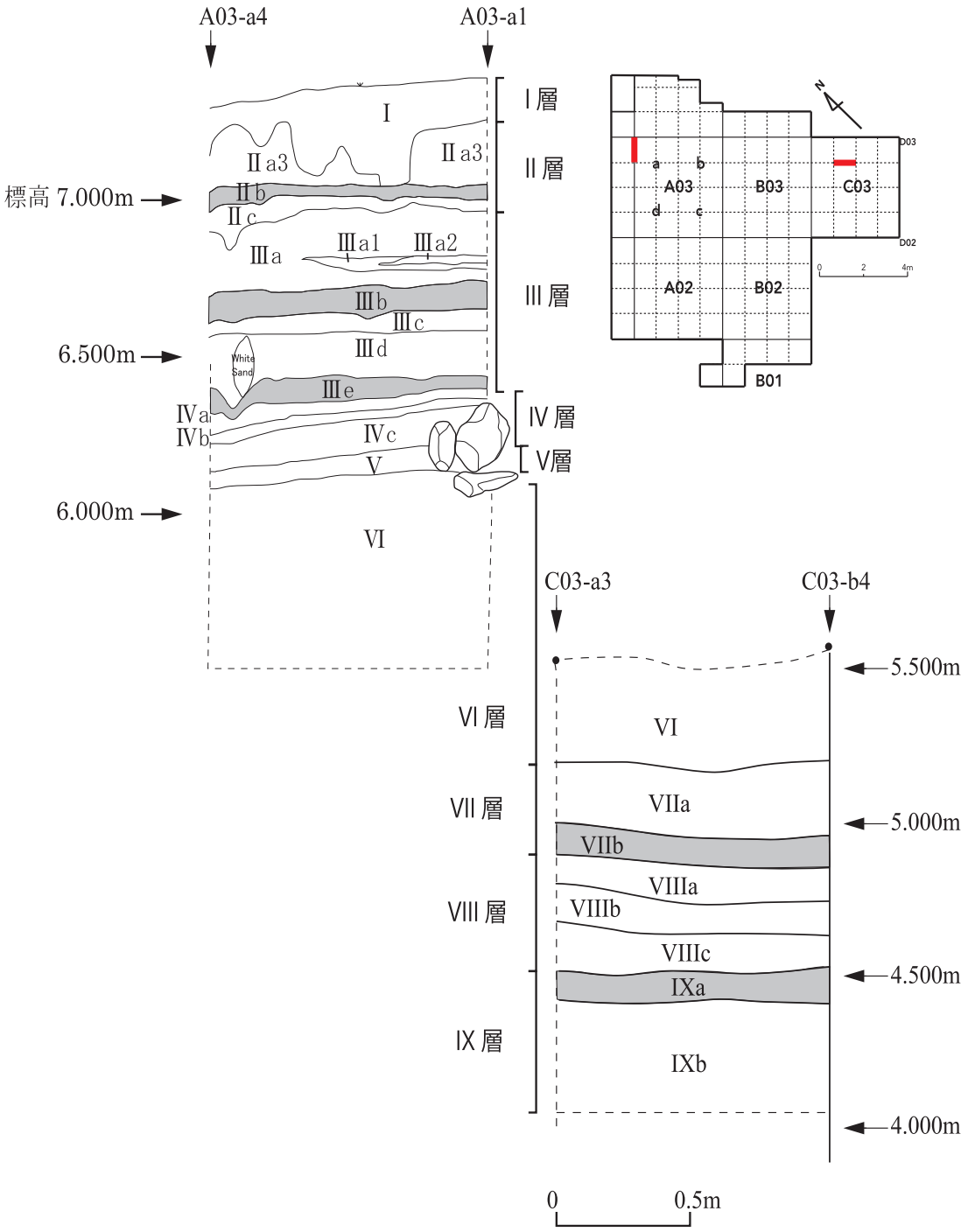


1: 1990年度 礼文町教育委員会調査地点
2: 1991年度 筑波大学調査地点（Na地点）
3: 1992年度 筑波大学調査地点（I地点）
4: 1994年度 国立歴史民俗博物館調査地点（Y地点）
5: 1994–1997年度 国立歴史民俗博物館調査地点（R地点）
6: 1991–1993年度 筑波大学調査地点（HA地点）
①②③: 2010–2014年度 千葉大学調査地点（第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ地点）

A: 2011–2017年度 北海道大学（16年度まではアルバータ大学[BHAP]と共同）調査地点（Nakatani地点）
B: 2013年度 BHAP試掘地点



第２図　遺跡周辺地形と調査区配置図



第３図　遺跡の基本層序

Ⅵ層：砂層。 続縄文文化期の文化層

Ⅶ層：砂層。 続縄文文化期の文化層でⅥ層よりも遺物や遺構が増える

Ⅷ層：砂層。 続縄文文化期および縄文文化晩期の文化層で獣骨の密集面を含む

Ⅸ層：砂層。 縄文文化晩期中心の文化層で獣骨の密集面を含む

となる。

第４章　検出された遺構

第１節　アイヌ文化期・オホーツク文化期の遺構

1）アワビ貝集積遺構

2016 年度に確認したアイヌ文化期のアワビ貝の集積は、1m × 1 m の範囲での確認にとどまり、全体的な広がりが不明であった。2017 年度は、調査グリッドを南側に小グリッド 2 つ分（2 ㎡）拡張した。その結果、拡張区においてアワビを主体とする新たな貝集積が 2016 年度に確認された貝集積よりも層位的に高い位置で確認された。新たに確認された貝の集積は、その南東側が後世の家屋建築の際に破壊されている（第 4 図）。撹乱部分からは、明治十年の年銘をもつ半銭、十五年の年銘をもつ一銭貨幣、電気配線用陶器製部品などが出土している。これらのことからこのアワビ貝の集積は、明治 10 年代以前に形成された遺構であると見なしうる。

貝集積を構成するアワビ貝には、方形～隅丸方形のヤスによる刺突痕が認められる。調査途中であるが、現時点では、前年度に確認した灰のブロックや人為的に折られたマキリやマレック、海獣骨を伴うアワビ送り遺構と類似した性格を持つ遺構と理解している。ヤスによる刺突痕をもつアワビの貝層は、本遺跡の B 地点（1990 年調査）や同じく船泊湾に位置する重兵衛沢 2 遺跡でも確認されている（松谷編 1986、前田・山浦編 1992）。これらの状況を踏まえると近世江戸期の後半には、船泊湾沿岸部にアワビ漁撈とその処理を行う場所が各所に存在していたことが伺える。

アワビは日本海交易の主要な産物として近世期に組織的かつ集約的な採取と加工が行われていた（佐藤 1997、東通村史編集委員会編 1999）。アワビ加工と関係する遺跡も広く北海道から東北北部に確認されており、小樽市桃内遺跡（1840 年以前）や奥尻町米岡 5 遺跡（近世 ?）、青森県東通村浜尻屋貝塚（14 ～ 15 世紀前半）、大平貝塚（17 世紀）、岩屋近世貝塚（18 世紀）などが知られている（東通村史編集委員会編 1999 ほか）。本遺跡で 2016 年度と 2017 年度に確認されたアワビ貝の集積遺構は、上述した近世の日本海交易の下で組織的・集約的に行われたアワビ貝採取と加工により形成された貝塚とは規模や内容が異なる。本遺跡に残された貝の集積は、自家消費的な利用により形成された遺構であると考えられる。昨年度に検出された集積遺構には、刀子などが共伴しており、遺構が儀礼的行為の痕跡である可能性を指摘した。本遺跡でのアワビ貝集積遺構の形成過程と要因については、今後の調査でより詳細に検討していきたい。

2）十和田式段階の墓

2017 年度調査では、オホーツク文化期前期の十和田式段階に比定される墓が確認された。埋葬された人骨（NAT004 号人骨）の遺存状態は良好であり、ほぼ完全な状態で副葬品を伴っている（第 5 図）。本例以外で明確に十和田式段階と認定できる埋葬例は、1993 年に同じ浜中 2 遺跡

のⅠ地点で筑波大学の調査で確認されたI-3号墓（熟年・女性）のみである（Ishida et al. 1994、前田・山浦編 2002）。従って今回確認された墓は、十和田式段階の埋葬例として2例目となる。

墓の存在は、A03-d1区を掘り下げる過程でⅤ層中において右側頭骨の頂点付近が部分的に出土したことで確認した。墓主体部を確認するために、東側に位置するZ03-c2区をⅢ層から人骨の直上まで掘り下げた。墓壙の掘り込み面および輪郭について確認を試みたが、明確に捕らえられたのは、第5図に示した実線部分のみであった。

被葬者は成人女性であり、墓には、珪質頁岩製両面加工石器 1点、海獣骨製刺突具 2点、骨針 3点が副葬品として伴っている（第7図）。埋葬遺体と副葬品との位置関係は、第5図に示した通り、両面加工石器および骨針は左前腕部付近に配置され、海獣骨製の刺突具は、それぞれ左右の橈骨・尺骨に平行する位置関係で出土した。なお骨製刺突具については、類似するものが1993年に調査されたⅠ地点のI-3号墓でも副葬されており、遺体胸部付近から出土している（前田・山浦編 2002）。

すでに述べたように現時点で、確実に十和田式段階に比定される埋葬は、本例を含め2例のみで、すべて同じ遺跡からの確認例である。したがって十和田式段階の埋葬を一般化することは難しい。しかしながら資料数の多いオホーツク文化中期以降の埋葬事例と比べると、いくつかの特徴を指摘することができる。（1）オホーツク文化後期を中心とする分析例（藤本 1965）と異なり、副葬品に性差が見られない点、（2）土器を副葬しない点、（3）礼文島型と呼ばれる墓制（藤本 1965、高畠 1998・1999）がすでに十和田式段階において現れつつある点、である。

今回の埋葬例は、一般的に男性の生業と関連づけられる大型の両面加工石器と、女性の生業に関連づけられる縫製道具としての骨針が共に副葬されている。この特徴は、被葬者の社会的位置、この時期の社会組織内の性的分業、物質文化と性差の関係を考える上で興味深い資料である。現在、年代測定やDNA解析、安定同位体分析を進めており、その結果を待ち、総合的に検討したい。

3）NAT004号人骨の形質人類学的所見

上位肋骨と左足の骨の保存状態はやや不良であるものの、その他の部位は概ね良好に保存されている。寛骨に見られる下記の形態学的特徴から、妊娠出産を経験した女性と推定される。すなわち、大坐骨切痕角および恥骨下角が大きく、恥骨が内外側に長く、腹側弧（ventral arc）と恥骨下陥凹（subpubic concavity）が明瞭に観察される。さらに、左右両側とも、耳状面と大坐骨切痕の間に妊娠出産痕が認められる。

脳頭蓋8か所、顔面頭蓋5か所、計13か所の頭蓋縫合の閉鎖状況を基に、日本人データを参照群とするSakaue（2015）の手法で年齢推定を行ったところ、90%以上の確率で35歳から49歳の間と推定された。右上顎第三大臼歯を除いて歯が全て残存していることや、四肢・体幹骨の大半の関節において、変形性関節症が進行していないことも、この個体が老齢ではないことを示唆している。

歯列全体にわたって咬耗が著しく、上顎大臼歯は舌側に、下顎大臼歯は頬側に偏って咬耗が進行している。第一大臼歯の咬耗の程度は、Brothwell（1972）の5+（歯冠のエナメル質が全て喪失）に相当する。右上顎第一大臼歯の舌側根を支持していた歯槽骨は歯周病のため溶解している。左

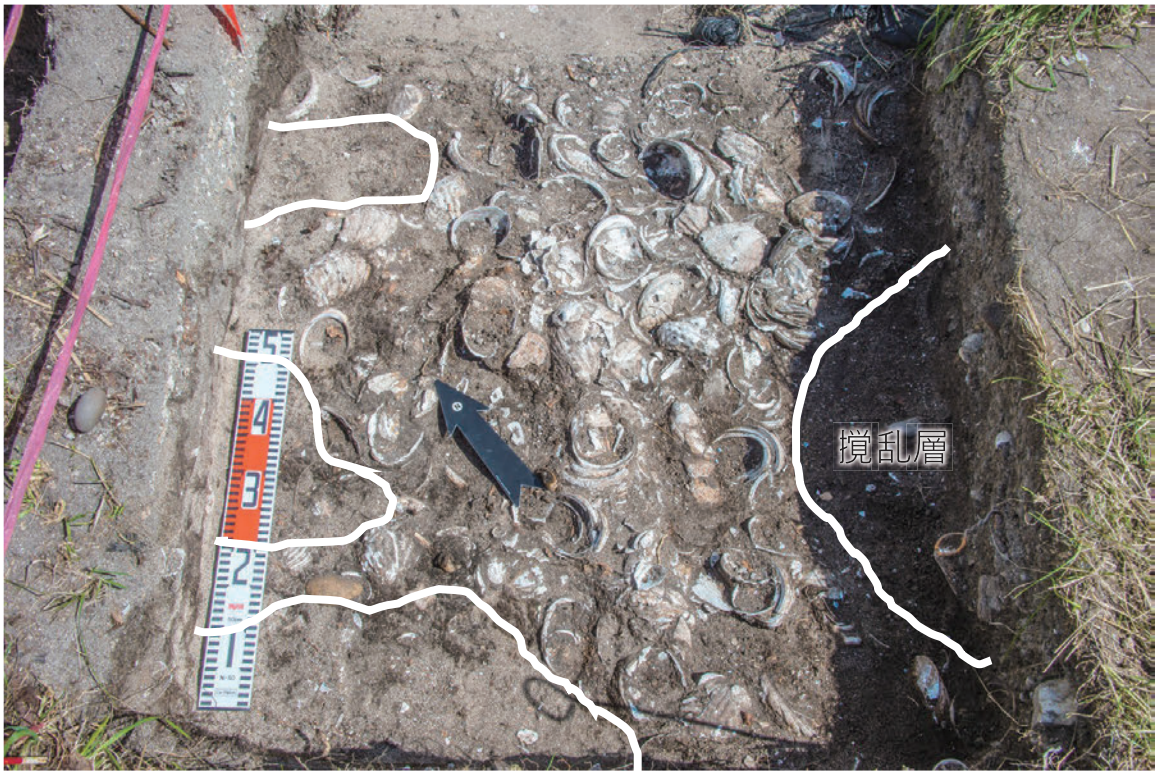
側頭骨下顎窩の前面で多孔性の変化が観察され、軽度の顎関節症を示唆する。四肢・体幹骨の関節は概ね正常だが、左右の大腿骨膝関節における膝蓋面と内側顆の関節面の境界、および右手の第三中手基節関節（中手骨、基節骨の両方）に骨過形成が観察された。

骨折の形跡が第 11 胸椎から第 4 腰椎にかけて見られた。第 11 胸椎から第 2 腰椎はそれぞれ椎体上面中央、第 3 腰椎は椎体下面中央において軽度の陥凹が見られる。第 4 腰椎の骨折が最も顕著で、椎体下面の左端 6 分の 1 が残りの部分から 6mm ほど外側下方にずれた状態で治癒している。栄養不良の指標となる眼窩上板の多孔性変化（cribra orbitalia）は観察されなかった。受傷痕は見当たらず、死因は不明である。

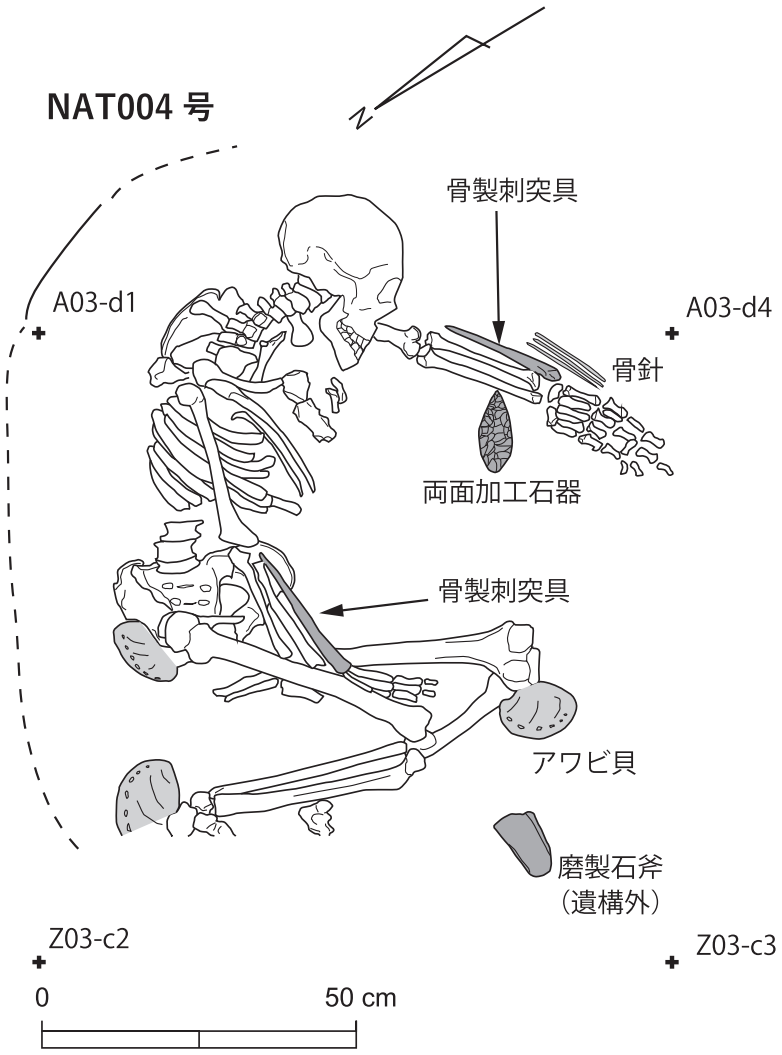
第 2 節　続縄文文化期の遺構

1）集石土壙

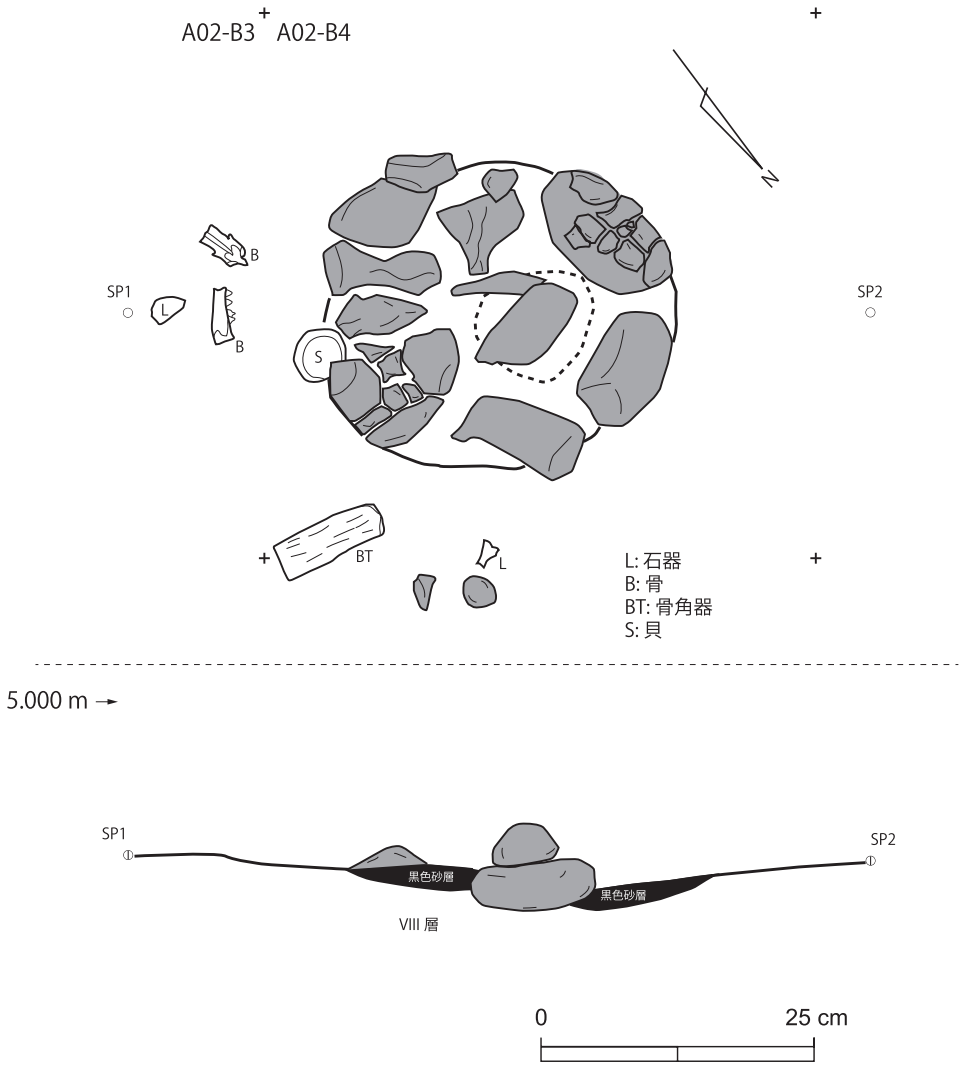
B02-b3 および b4 の VIII 層中から、礫を充填した炉跡が出土した（第 6 図）。本遺跡では、オホーツク文化期から続縄文文化期相当層においてこれまでにも多く集石土壙とみられる遺構が検出されているが、その中でも小規模な部類である。土壙自体は非常に浅く、燃焼に伴って形成された黒色砂層の堆積も薄い。炉を構成する礫は被熱と風化によって一部破砕している。土壙の周辺には海獣下顎骨、海獣骨製の骨角器未成品や石器などが出土したが、土壙との関連は不明である。



第 4 図　B01-a4 アワビ貝集積



第 5 図　NAT-004 号人骨出土状況平面図



第 6 図　集石土壙



第 7 図　NAT-004 号人骨に伴う副葬品

第５章　主な出土遺物

第１節　出土遺物の構成

本年度の発掘調査においては、表土であるⅠ層から縄文文化後期と推定されるⅨ層まで、各層から多様な遺物が出土した。層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中だが、現場でトータルステーションを用いて3Dデータを記録して取り上げた主な資料は土器片 271 点、石器 1100 点、骨角器類 70 点、動物遺存体 392 点、金属製品 3 点 であった。その他の人工・自然遺物を含めると、記録点数は 計 1936 点であった。 なお骨角器類とは典型的な製品やその破損品だけでなく、加工痕跡やカットマークのある資料を含めた点数である。

第２節　土器

1) オホーツク文化期・続縄文文化期

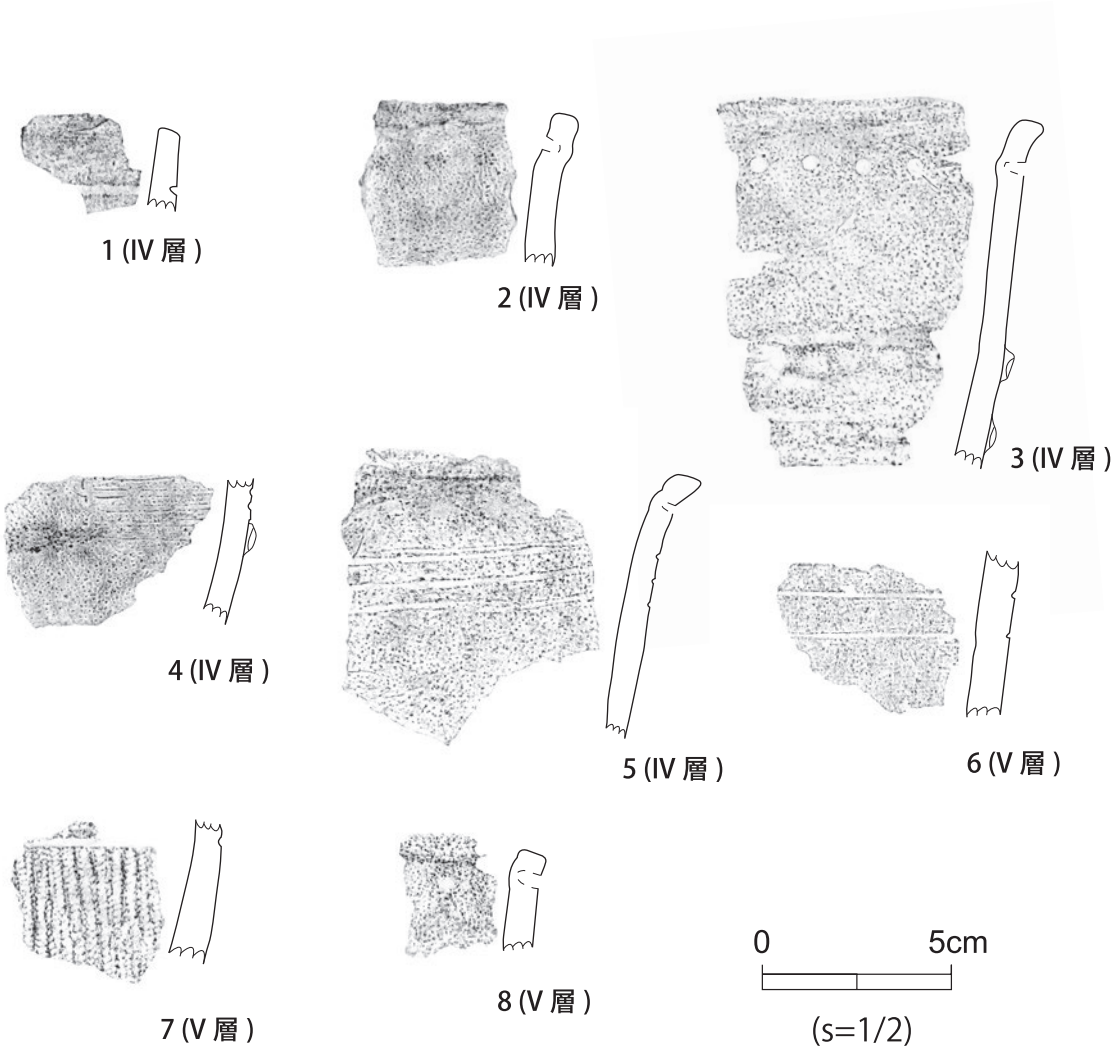
第８図１～７に示したものは、Ⅳ層からⅤ層にかけて出土した土器片である。２～６、８は十和田式土器に属する。これらはすべて口縁下に外側からの刺突が列点状に配置されている。３は口縁破片で、口縁下の円形刺突に加えて、胴部に横走する隆帯を貼付け、表面に押捺を加えている。４は胴部破片であるが３と同様の横走する貼付けがみられる。５は口縁下のに円形刺突をもち、、胴部に横走する沈線を平行されたものである。６は胴部破片であるが５と同様の横走する沈線がみられる。８は口縁部の小破片であり、口縁下に円形刺突がみられる。２は内側からの刺突により突瘤文を口縁下に列点状に配置したものである。器形的には他の十和田式土器と同様の器形をもつと思われる。ここでは便宜的に十和田式土器の範疇に含めた。

１はⅣ層から出土したものであるが、オホーツク文化期の沈線文土器の口縁部破片であり、撹乱による混入であろうと思われる。７はⅤ層から出土した続縄文土器の頸部破片である。縦走する細い縄文を地文とし、上部に横走する沈線がみとめられる。

2) 縄文文化期

2017 年調査のⅧ･Ⅸ層出土の縄文土器は、縄文晩期後葉の深鉢、鉢形土器、浅鉢が出土している。これらの縄文土器は復元可能な半完形品も含まれ、現在、整理途上で、その一部を紹介する（第９図）。

Ⅷ・Ⅸ層出土の縄文晩期後葉の土器は、浜中大曲式（１～６・９～11）が主体で、幣舞式（7・

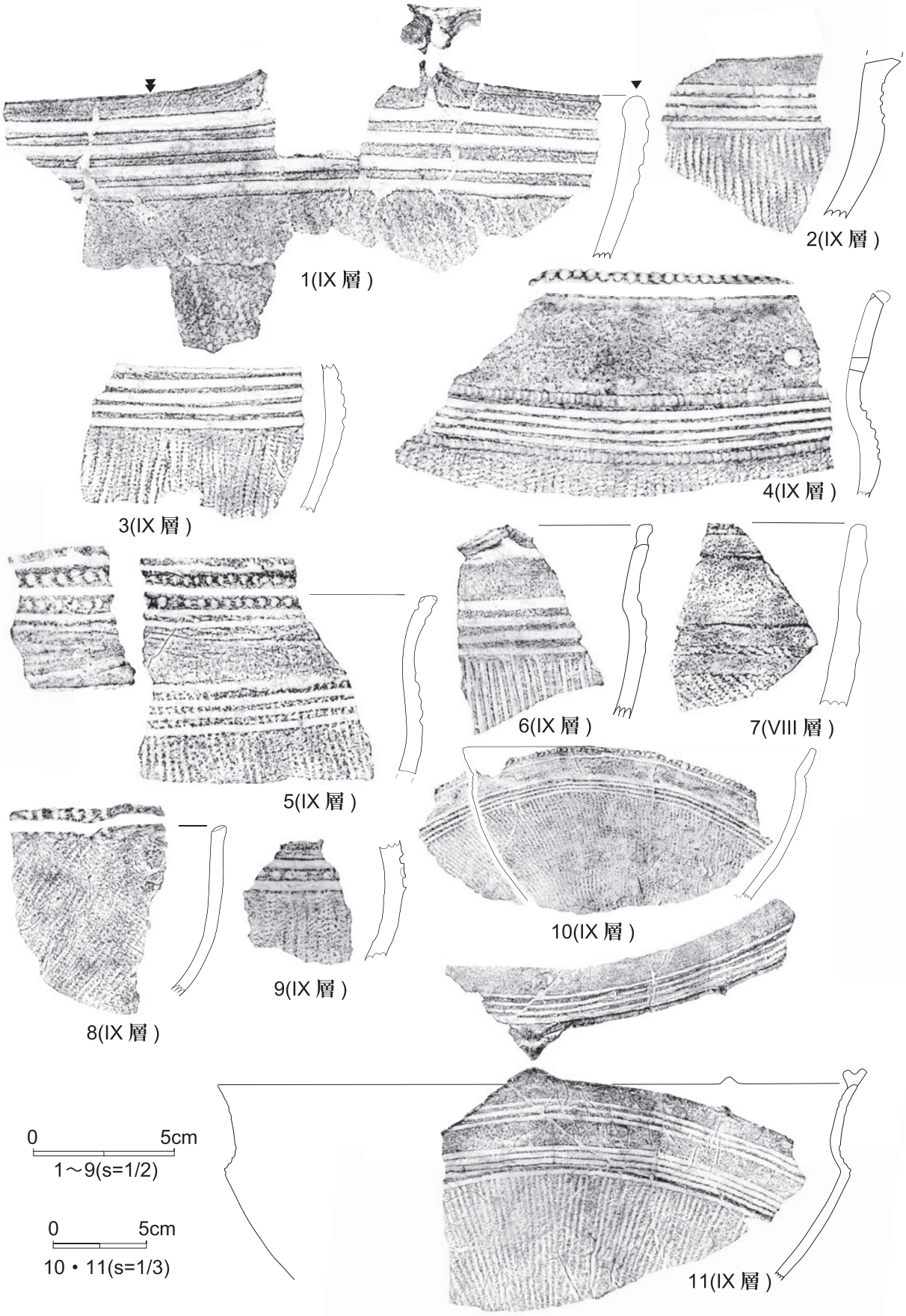


第 8 図　IV ～ V 層出土 土器資料

8）が少量出土している状況が看取される。浜中大曲式の深鉢には砲弾形（1）と肩部で屈曲するもの（2 ～ 6）があり、両者ともに口縁や胴部に沈線文、あるいは刻目列を充填し、装飾することに特徴がある。1 は、口縁に山状の突起を二つ付けることで波頂を形成している。口縁には 4 条の幅広な沈線を施すとともに、突起下部にはトゲ状のエグリ、突起頂部にも刻目を施している。4 は口縁先端部が剥離しているが、口唇内面に刻目が施されている。5 は口唇外面・内面に刻目、内面には刻目下部に 1 条の沈線が施されている。 6 は突起を付けることで波状口縁を形成し、胴部に沈線文、その下部に地文として条痕が施されている。9 は鉢形土器とみられ、沈線間に円状の刺突が充填されている。10 の器壁は薄手で、平縁の黒色研磨浅鉢とみられるが、突起部分が欠けているとみた場合、小波状口縁浅鉢の可能性も残る。11 は大形の鉢形土器である。口縁には山状の突起を付けることで波頂を形成し、波頂間にも小形の突起を付けている。口縁外面上部と下部、及び口縁内面にも沈線文を施している。

7 は深鉢で口縁に 1 条、胴部に 2 条の浅い凹線が施されている。 8 は小形の鉢形土器で、口縁に小山状の突起を付け波頂を形成する。波頂部、及び口唇部にツメ状の刻目が施されている。

これら縄文晩期後葉の資料は、本遺跡 R 地点 IV 層と Y 地点 VI 層出土の当該期の資料を補完



第 9 図　VIII ～ IX 層出土 土器資料

するまとまりの高い資料になる可能性がある。本遺跡 Y 地点 VI 層では、幣舞式が続縄文土器やオホーツク土器と混在していたため、幣舞式と浜中大曲式の共伴関係については不明瞭であった。今後さらに本地点のⅧ・IX 層出土品を詳細に調べることで、両者の共伴関係を検討していく必要がある。なお、7・8 は幣舞式とみられるが、胎土は浜中大曲式の深鉢と近似し、在地産の可能性がある。Y 地点 VI 層からも幣舞式（国立歴史民俗博物館 2000: 図 3-3-34）が出土しており、これら資料の胎土分析を行うことで、在地産なのか、あるいは搬入品なのか判別していくことが今後の課題であろう。

既述の通り、Ⅷ・IX 層出土の縄文晩期後葉の土器は、時期的なまとまりが看取され、本地点の当該期における海獣狩猟や漁労活動、及びそれらに伴う石器製作を分析するうえでも重要な情報を提供することになるであろう。本遺跡 R 地点では、砂丘遺跡に特有な自然、及び人為的な要因による縄文土器、続縄文土器、オホーツク土器の異なる層位間における接合関係が確認されている（坂口 2004、Sakaguchi 2007）。今後、Na 地点出土資料の平面・垂直分布、及び土器・石器の個体別資料や接合関係の詳細を検討することで、本地点における活動内容や遺跡形成過程を分析していく必要がある。

第 3 節　石器

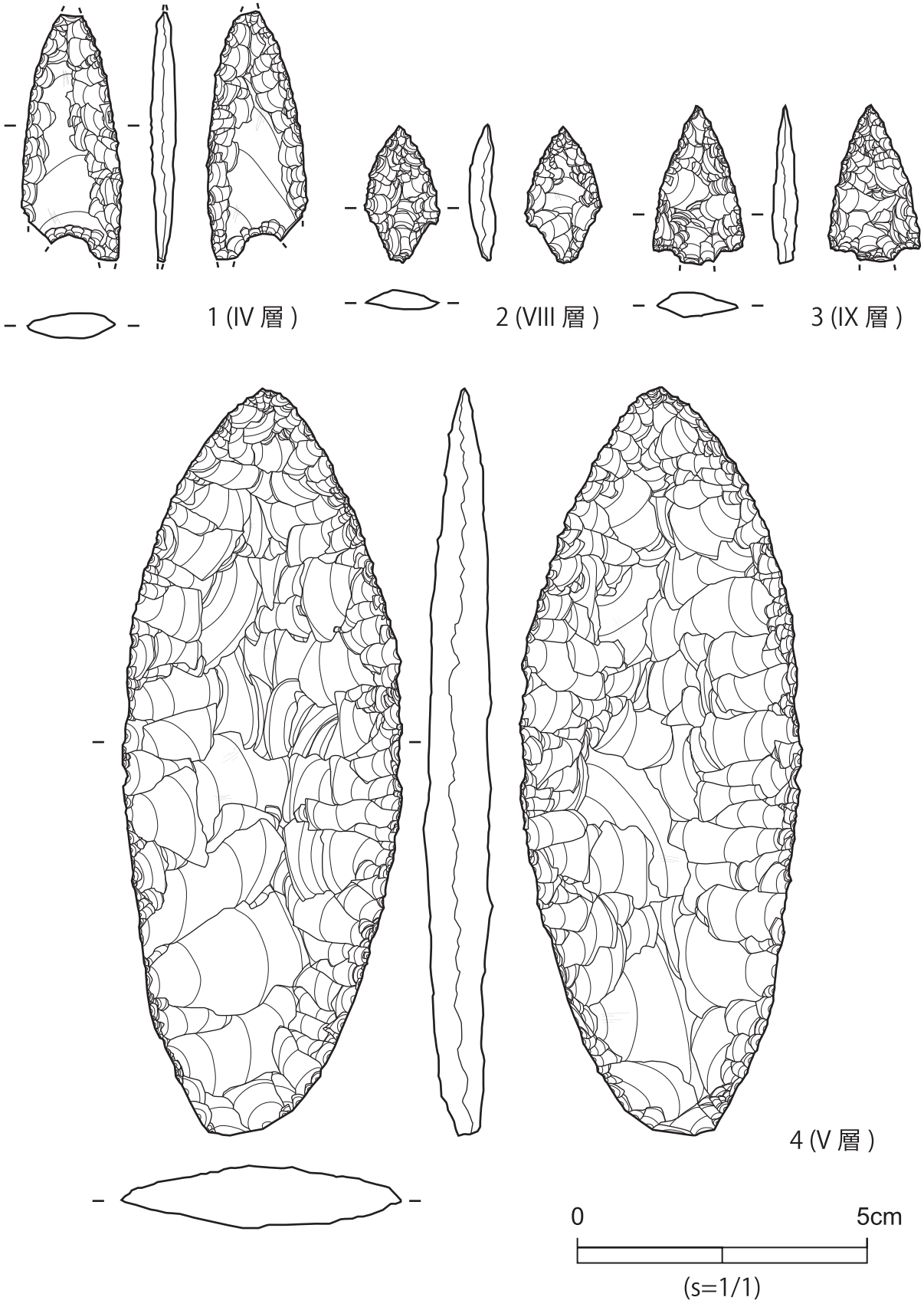
今年度の発掘調査では、主に IV、VIII、IX 層から特徴的な石器製品が出土した。本概要報告では、そのうち 4 点を図示し、それらの特徴を記載する（第 10 図）。

1 は、IV 層から出土した石鏃である。周縁部全体に二次加工が施され整形されているが、尖頭部以外の器体中央部は素材剝片の剝離痕を残したままである。基部には抉りが設けられているが、左右はそれぞれ破損している。先端部にも若干の欠損が生じている。石器石材は、珪質頁岩である。

2 は、VIII 層出土の石鏃である。器体の周縁部全体に両面共に入念な加工が施されている。裏面の器体中央部には、素材剝片の剝離痕が一部残存している。表面からみて右側縁には明確に肩が造り出されているが、左側縁においては顕著ではない。石器石材は黒曜石である。

3 は、IX 層出土の石鏃である。器体両面の全体に加工がおよんでおり、基部には肩と茎部が造り出されている。茎部はその末端が折損している。石器石材は黒曜石である。

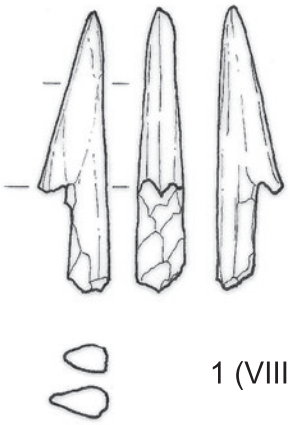
4 は、オホーツク文化期十和田式段階の NAT004 号人骨に副葬されていた両面加工石器である。器体両面の全体に二次加工が施され、木葉型に近い外形が造り出されている。石器上端は尖頭状であるが、全体の器形が完全なシンメトリーではないため両面加工石器とした。器体の上半分には刃部の最終的な整形が行われたことを示す微小な調整剝離痕が密集している。下端は、上端とは対象的に入念な加工が少なく素材剝片の打面が残存している。石器石材は、濃灰色の珪質頁岩またはそれに類似した潜晶質石材と考えられる。実測図上では示されていないが、下端部分はそれ以外の部分と異なり、石材が風化浸食され明黄褐色を呈している。



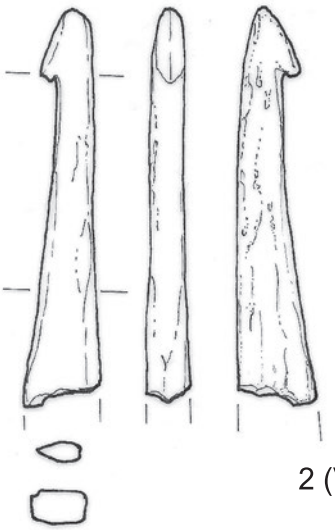
第 10 図　IV ～ IX 出土 石器資料

第４節　骨角器

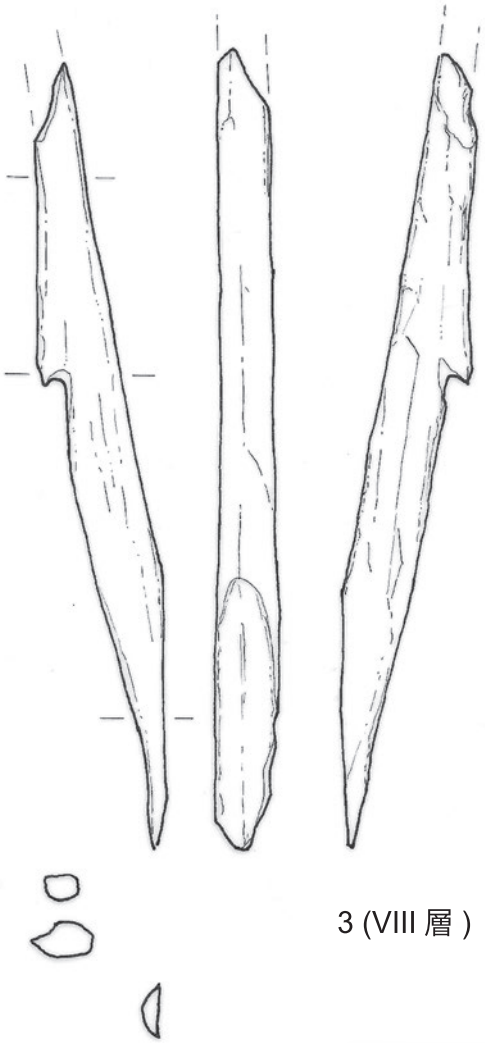
第11図には2017年度に出土した主要な骨角器を図示した。１～４は第Ⅷ層から出土したもの、５は清掃時の出土のため層位は特定できない。１は、ヤスの先端部の欠損品である。ともに先端のみで中央部から基部にかけては欠損している。逆刺の部分はかなり使い込まれており、摩滅が激しい。３は、組合せ式のヤスの一部である。先端は欠損している。１～３はともに海獣骨製。４はアワビ貝製の平玉である。５は銛頭の先端部である。先端は根バサミ型となっており、下部には索孔の一部が残存している。鹿角製と思われる。



1 (VIII 層)



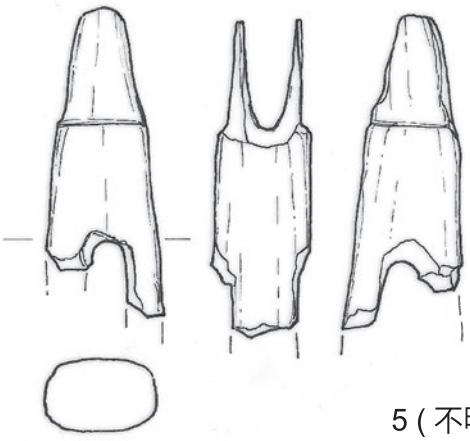
2 (VIII 層)



3 (VIII 層)



4 (VIII 層)



5 (不明)

0 5cm

(s=1/1)

第 11 図　2017 年度出土骨角器

第６章　まとめ

本年度の調査は、当初、近世江戸期に比定されるアイヌ文化のアワビ貝の集積遺構の広がりと、縄文晩期相当層の遺物分布状況の確認を主たる目的として行った。今回確認されたアワビ貝の集積遺構の平面的な広がりは、未だに確認できていない。しかしながら、異なる形成時期のアワビ貝の集積が層位的に重複していることを確認できた。今回新たに確認された十和田式段階の埋葬例は２例目の確認であり、オホーツク文化期の形成過程やオホーツク文化を担った集団の系統を議論する上で重要な発見であると考えている。縄文文化期の文化層に関しては、海獣骨や鳥骨と土器や石器が集中し、調査区全体に面的に広がることが確認されている。土器は、完形に復元可能な個体が複数含まれており、現在これらの整理と復元作業を進める中で型式判別を行っている。遺跡最下部の文化層の確認は、引き続き次年度も継続して調査する予定である。各層の形成過程と時期については、資料整理と現在並行して進めている年代測定結果を待って、報告書で報告したい。

本調査の実施にあっては、地権者である中谷榮氏、浜中自治会長の相原栄氏をはじめとする浜中・船泊両地区の皆様、そして礼文町教育委員会 藤澤隆史氏に多大なご助力とご支援を賜った。末筆ながら感謝申し上げます。

引用・参考文献

Ishida, H., Hanihara, T., Kondo, O., and Oshima, N. 1994. A Human Skeleton of the Early Phase of the Okhotsk Culture Unearthed at the Hamanaka-2 Site, Rebun Island, Hokkaido. Anthropological Science 102(4): 363–378.

岩波連、長沼正樹 2015「浜中 2 遺跡の遺跡形成過程とその特異性」『一般社団法人日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、東京、154-155 頁

岩波連、平澤悠、岡田真弓、種石悠、長沼正樹、藤澤隆史、蔦谷匠、佐藤丈寛、深瀬均、木村亮介、米田穣、安達登、佐藤孝雄、石田肇、加藤博文 2016「礼文町浜中 2 遺跡における考古学調査 (2011-2016 年度)」北海道考古学会 (編)『2016 年度北海道考古学会遺跡調査報告会資料集』、北海道考古学会、登別、83-92 頁

加藤博文 2015「礼文島における海洋適応史の復元 - 国際共同研究を通じた取り組み -」岸上伸啓 (編)『国立民族学博物館調査報告 132 環北太平洋地域の先住民文化』、国立民族学博物館、大阪、125-143 頁

加藤博文、岩波連、平澤悠、鈴木建治 2012『2011 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡考古学調査概要報告書』、 北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、http://hdl.handle.net/2115/52658

国立歴史民俗博物館 2000『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集

児玉作左衛門・大場利夫　1952 「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』7、167–270 頁

坂口隆 2004「砂丘遺跡における廃棄パターンと行動分析：北海道礼文町浜中 2 遺跡 R 地点の事例研究から」『古代』114 号 51-70 頁

Sakaguchi. T. 2007. Refuse Patterning and Behavioral Analysis in a Pinniped Hunting Camp in the Late Jomon Period: A Case Study in Layer V at the Hamanaka 2 Site, Rebun Island, Hokkaido, Japan. Journal of Anthropological Archaeology 26 (1): 28-46

Sakaue, K. 2015. A Bayesian approach to age estimation from cranial suture closure in Japanese people. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. D, 41: 1–11.

佐藤孝雄　1997 「中・近世における北海道アイヌの狩猟と漁撈」『考古学ジャーナル』 No.425、13-18 頁

高畠孝宗　1998 「オホーツク文化の墓」『第 5 回 環オホーツク海文化のつどい報告書 1997 No.5』北の文化シンポジウム実行委員会委員長 油谷昌幸、81–95 頁

高畠孝宗　1999 「オホーツク文化の墓」『シンポジウム 北と海峡の考古学－文化の接点を探る－ 資料集 II』日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会、230–240 頁

西本豊弘編　2000 『国立歴史民俗博物館研究報告　第 85 集　浜中 2 遺跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館

東通村史編集委員会編　1999 『東通村史 遺跡発掘調査報告書編』東通村

藤本強　1965 「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』6、15–30 頁

Brothwell, D.R. 1972. Digging up Bones. second edition. British Museum, London.

北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室（編）2014『2013 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/56663

北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室（編）2015『2014 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/58760

北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室（編）2016『2015 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌

前田潮・山浦清編　1992 『北海道礼文町 浜中 2 遺跡の発掘調査』北海道礼文町教育委員会

前田潮・山浦清編　2002 「礼文島浜中 2 遺跡第 2 ～ 4 次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13、35-87 頁

松谷純一編　1986 『重兵衛沢 2 遺跡』北海道礼文町教育委員会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	にせんじゅうななねんど ほっかいどうれぶんちょう はまなかにいせき はっくつがいようほうこくしょ
書　　名	2017 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書
副 書 名	Preliminary Archaeological Field report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室（加藤 博文、平澤　悠）
編 集 機 関	北海道大学アイヌ・先住民研究センター
所　在　地	札幌市北区北８条西６丁目
発行年月日	2018（平成 30）年 3 月 31 日 作成

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
はまなか にいせき 浜中 2 遺跡	ほっかいどう れぶんぐん れぶんちょう おおあざふなどまりむら あざほろないほ 北海道 礼文郡 礼文町 大字船泊村 字ホロナイホ	01517	H－08－19	45° 43′ 26″	141° 00′ 96″	20170801 ～ 20160825	32 ㎡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜中 2 遺跡	遺物 包含地	アイヌ文化期 （近世）	アワビ殻を 特徴とする 混土貝層	方形の孔を有する アワビ貝殻、 明治年銘の銅銭	Ⅰ層中に新たにアワビ 貝集積を検出した
		擦文文化期 オホーツク文化期 （古代）	十和田式段階 の埋葬墓	土器片（擦文土器、オホ ーツク土器）、石器、 骨角器	十和田式段階の埋葬墓 と副葬品が出土
		続縄文文化期 （鉄器時代～古代）	集石土壙	土器片、石器 （両面調整石器など）	
				骨角器類 （ヤス先など）	
		縄文文化期 （新石器時代）	動物骨・遺物 集中分布	動物遺存体、土器、 石器 （海獣類、鳥類など含む）	Ⅸ層で動物遺存体の 著しい密集を検出した

要　　約	B01 調査区で I 層中で近世アイヌ文化期の送り場と考えられる新たなアワビ貝殻の集中を確認した。 B02 調査区で V 層中に大型礫が線状に配置されていると考えられる状況で出土した。 Z02 調査区で V 層中に成年女性人骨が副葬品と埋葬された状態で出土した。 A03 調査区と B03 調査区で縄文文化期のⅨ層では、2016 年度に引き続き動物骨と土器片や石器とが密集した状態が面的に広がる状況を確認した。

2017 年度
北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書

2018 年 3 月 31 日　作成
編集　北海道大学アイヌ・先住民研究センター　加藤博文研究室
060-0808　札幌市北区北 8 条西 6 丁目